

1 付加価値の解釈

付加価値とは意図せず生み出されるものである。自然な行為から生み出されるものこそ、その場所に更なる価値を見出す。地域の人々が自然体で過ごす中で生み出された価値は、地域全体の価値となる。

2 問題点

現在の住宅は、周囲を堀で囲むことで境界を作っている。そのため、他人の敷地には容易に入ることにはためらいを感じる。その例として「こども110番の家」がある。本来ならばこども110番の家は地域のこどもたちがいつでも駆け込める場所であるべきだが、形骸化しているという現状が見受けられる。

住宅はそこに住む家族のためだけの場所であり、これはそこに住む人がいる限り変わらない普遍的なものである。しかし、時の移ろいによる家族形態や

3 提案

私たちの提案は時間経過につれて変化する家族形態や地域との関係性に伴い、家族の居場所から徐々に地域の居場所へと移り変わっていくものである。また、様々な地域により暮らし方が異なることで、住宅自体がその土地性を表すものとなる。

異なる暮らし方から生まれた人々の自然発生的な行為が付加価値であり、それが積み重なっていく家を提案する。

敷地



対象敷地は広島県佐伯区に位置する。周辺一帯が傾斜地になっており、近くには西広島バイパスが通っている。南側には五日市東小学校があり、この地区は通学区域となっている。

住人

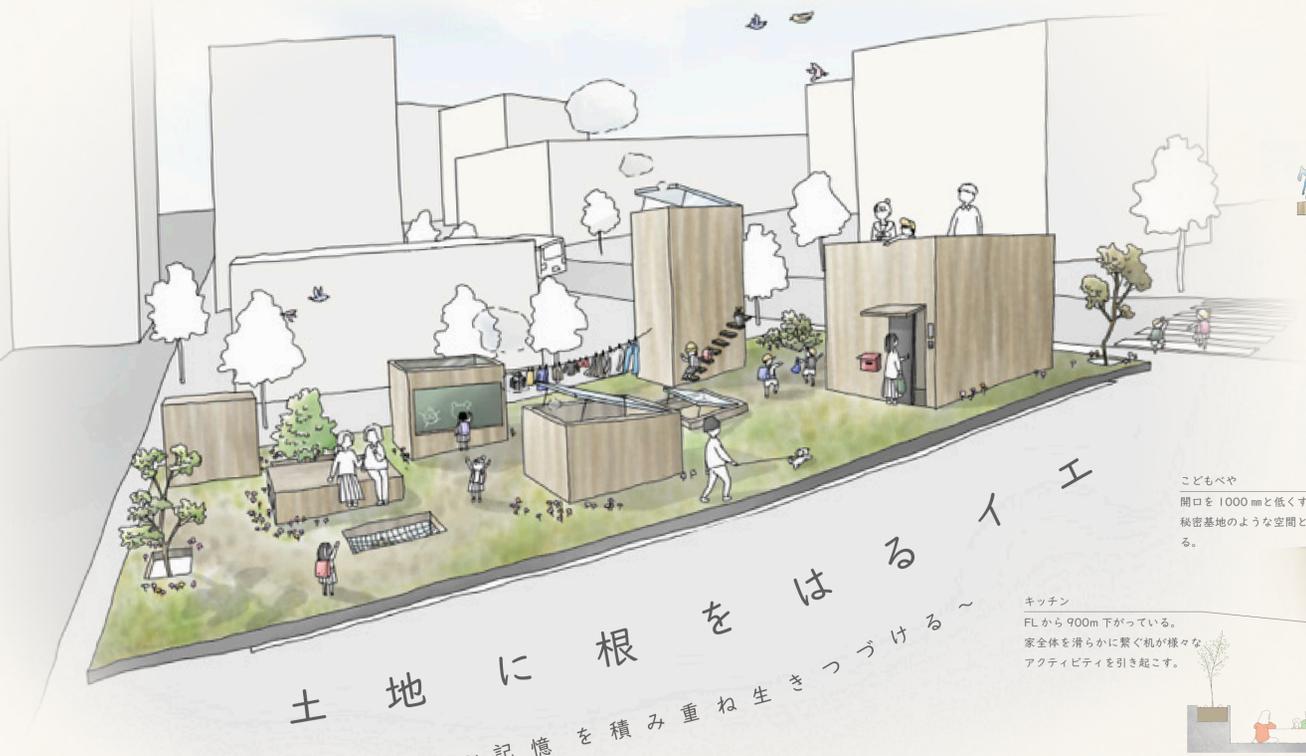
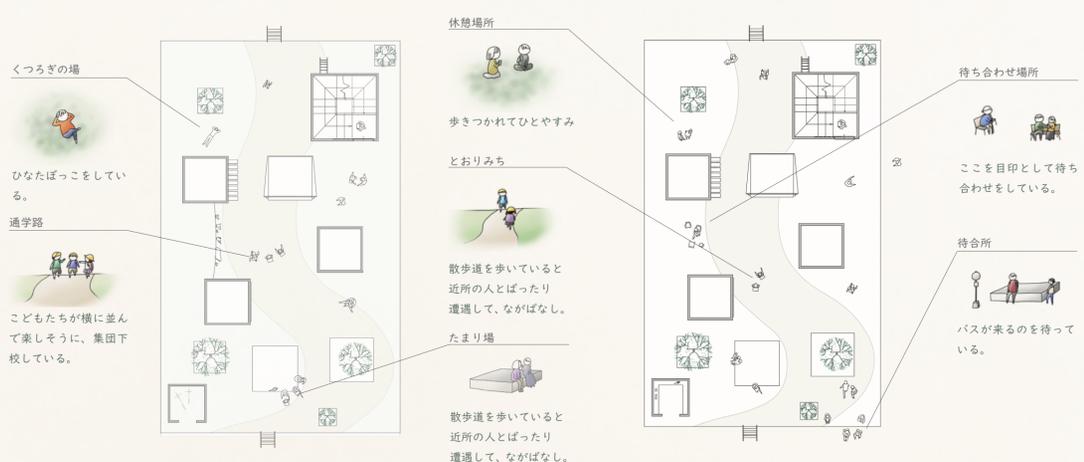
妻 (42) 料理好き
夫 (45) 園芸好き
長男 (5) 幼稚園児 狭いところが好き
長女 (10) 小学四年生 お花が好き

この家族は、日常的に園芸を楽しんでおり、住宅内には多くの植栽が育てられている。

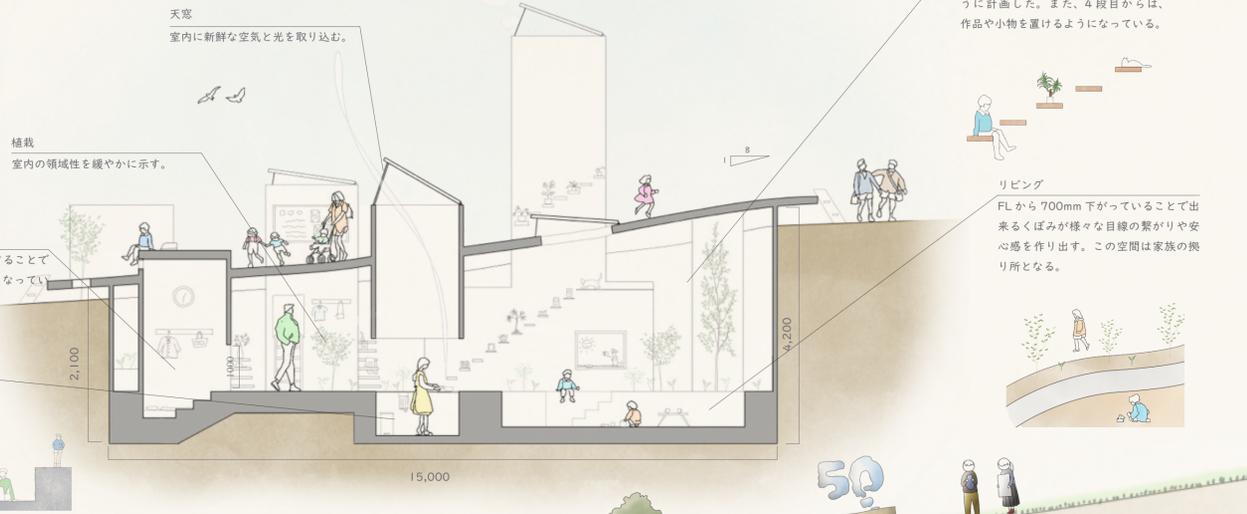
可変的な屋根

屋根の上は毎日人が通ることのでき、いつの間にか小学生の通学路や放課後の溜まり場として使われるようになるかもしれない。また、こどもたちが学校で作った作品が東屋に集まり、いつかは地域のギャラリーのような場所となるかもしれない。

このように屋根は置かれた敷地や使う人々により様々に変化する。土地性や地域性が異なることによる郊外と都心部での使われ方を例として取り上げる。



断面図



家族四人暮らし。園芸好きの家族は、緑に囲まれながら生活を送る。家族で過ごす場と夫婦の部屋は一体化し、子供を見守ることができる。

息子(5歳)と娘(10歳)の部屋の開口は高さ1000mmと低いため、秘密基地に潜るような感覚で過ごすことができる。

娘や息子の友達が遊び来ようになり、近所のこども達のたまり場となりつつあった。



住み始めて20年が経過した。子供が巣立ち、夫婦二人暮らしとなった。20年間で地域の家族間での交流が深まり、両親の帰りが遅いこどもが立ち寄って宿題をしたりご飯を食べて帰るようになった。

それから、地域のこども達にとって気軽に立ち寄れるみんなの家になっていった。そして、娘と息子が使っていたこども部屋は、地域のこども達の遊び場になっていった。



住み始めて50年が経過した。娘と息子が建物を管理するようになり、かつて住宅だったこの建物は、地域の人々が集まるギャラリー空間となった。徐々にこどもが持ち寄った作品で部屋が埋まっていった。こどもの交流から始まったギャラリーに大人たちの作品も飾られるようになった。

そして、父親が始めた園芸教室は近所の住人が引き継がれ、4人で住んでいた住宅は、地域の人々の拠り所となる開放される場へと変わっていった。